

# スポーティーな身体

## ワイマール時代のスポーツと モードの言説にみられる女性身体

鷺巣由美子

### はじめに

「一番たちが悪いのは、新しい時代に調子を合わせる年寄よ。今風なスポーティーなわかもの、ドライブ、短い丈の服、ショートヘア、ジャズミュージックのことを書き立てる人がいるじゃない [...]」<sup>1)</sup>

イルムガルト・コインが1931年に発表した小説『ギルギ』の中で、表題の名前をもつ主人公は、若い世代をマスメディアがもてはやすさまを皮肉って、こう言っている。たしかに彼女の言うように、ワイマール時代には、新聞、小説、映画、そして何よりモード雑誌で、スポーティーなわかものが、新しい時代の理想的なタイプとしてさかんに取り上げられていた。なかでも、「短い丈の服、ショートヘア」の女性をマスメディアは好んでとりあげていた。実は、そう言っているギルギ本人も、会社に行く前に毎朝部屋で体操にはげむスポーティーな女性なのだ。

当時の都市には、ギルギのようにスポーティーなモードに身を包み、体操やダンスに励む女性の姿が多く見られた。彼女たちの身体は新しさの表徴に満ちている。それまでの女性身体は否定され、投げ捨てられたかのようだ。以前は女性の身体はコルセットと足首まで覆う衣服によって拘束され、うごきが制限されていた。いまや女性は、軽快で機能的なスポーツウェアに身を包み、手足を露出し、これを自由に大きく動かし、スポーツに

---

1) Keun, Irmgard: Gilgi—eine von uns. Hildesheim 1993 (Erstveröffentlichung 1931), S.102.

興じている。か弱さ、繊細さという「女性の特長」によって規定されていた身体とはまったく異なった、新しい身体が出現している。

こうした新しい女性の姿は、マスメディア、とくにモード雑誌を賑わせた。『淑女』(Die Dame ベルリン、1912-1943)、『エレガントな世界』(Elegante Welt デュッセルドルフ、1912-1969)といったモード雑誌は、スポーティーな女性を理想の女性像として増幅し流通させていった。そこでは、スポーティーな身体とそれを包む装いがおしゃれな最新のモードとして紹介され、その魅力はモードの装いをまとった有名な女性たちの写真によって高められている。モード雑誌の誌面の半分以上を占めていた広告もまた、スポーティーな女性のための化粧品や衣服の紹介に余念がない。なかには1895年に創刊された『イラストで見るスポーツ』(Sport im Bild ベルリン、1895-1934)のように、スポーツをモードとして語り始めてすでに久しい雑誌もあった。この誌面は、大半が、スポーツをする上流の婦人や映画スターの姿、彼らの装い、スポーツに合う流行の衣服の紹介に割かれている。また20年代のモード雑誌には、フランスのテニス選手シュザンヌ・ラングランといった若く美しくファッションナブルなスポーツ選手の写真が大きく載せられ、モード写真と並んで誌面を飾っていた。スポーツはファッションとなった。

他方でスポーツの領野では、女性の身体運動について幾多の本が出版され、また女性の身体運動をあつかう新聞・雑誌が創刊された。たとえば『女性体操・スポーツ新聞』(Frauen-Trun-und Sport-Zeitung ライプツィヒ、1919-1926)がある。「女性の」と明記していなくても、多くのスポーツ新聞・雑誌では、女性の身体運動を頻繁に論じていた。これらスポーツの言説が取り上げる種目は多岐にわたっている。以前は女性の身体運動についての記述は、もっぱら体操(TurnenとGymnastik)に限られていた。それがいまや、水泳、ダンス、陸上競技にまで広がった。これは、実際のスポーツ活動が多彩なものになっていたことを反映している。

モードとスポーツの雑誌は、スポーティーな女性身体を新たな理想的身

体像として媒介し、そのイメージを増幅した。この身体像の流行とともに、多くの女性に、まったく新しい身体への可能性が開かれたことだろう。女性は、この身体像に自らを重ね合わせ、自らのからだを投入して、からだを動かす快樂、身体感覚に身をゆだねる快樂、見せる快樂を経験できたかもしれない。スポーティーな女性身体がよく「身体の解放」として語られる所以である。

他方で、身体は社会の権力構造の中で、言説によって構築される。女性スポーツ社会学の第一人者ジェニファー・ハーグリーブズの言うように、女性身体は「ある特定の言説と社会権力の諸形態によって構築され、またそれらの本質的な構成要素でもある。」<sup>2)</sup> スポーティーな女性身体も、言説によって構築されたものである以上、ファロスの権力から解放されたものではありえない。それではスポーティーな身体という身体像の出現とともに、どのような女性身体が構築されたのか。

スポーティーな身体をもっとも頻繁に取り上げたのは、モードとスポーツの言説であった。この二つの言説は、大衆雑誌というマスメディアにおいて、スポーティーな身体を論じ、表象した。そしてメディアを媒介として都市の若い女性に新しい身体イメージを提供し、彼女たちのアイデンティティ構築や自己表象に規範的な影響を及ぼした。ここでは女性身体はどのように語られているのだろうか。本稿では、モードとスポーツの言説に焦点をあて、そこで構築されるスポーティーな身体のイメージをたどってみたい。

だがまずは次章において、新しい身体像が作り出される土壌を提供し、同時にこの身体像が普及し定着した結果でもある女性スポーツの興隆を、その背景とともに概観しておこう。

---

2) Hargreaves, Jennifer: Muscle-metaphor and myth: examining women's sporting body. (1998年11月10日に行われた日本スポーツ学会における講演の未発表原稿) S. 8. この原稿をご教示くださり快く見せてくださった広沢絵里子さんに感謝いたします。

## スポーツの時代における女性スポーツ

ワイマール時代の女性スポーツの普及には、戦時中からの女性の身体観の変化が反映している。第一次大戦は女性解放に大きく寄与したといわれてきた。もちろんこの説は、現在では相対化されて語られるようになっている。安価な労働力としての女性の搾取、労働条件の悪化などの陰の部分にも焦点があてられるようになったからである。しかし身体性と身体運動という観点から見ると、やはり第一次大戦はひとつの大きな転機であったと言える。この時期に、経済的理由と人手不足から女中の数を減らす、または解雇する家庭が増え、中上流市民層の女性にとって家事が肉体労働となった。また多くの労働者階級の女性が、それまで男性に独占されていた溶接工、板金工といった職に進出した。衣服も戦争の影響で変化を遂げた。物資不足と労働上の理由から、生地をたっぷり取った脚まで覆い尽くすドレスに代って、実用的なスーツやワンピーススタイルが定着してきたのである。このスタイルの衣服の登場で、コルセットもついに終焉に向かうこととなった。

女性スポーツの普及のもうひとつの下地は、ワイマール時代にドイツを覆ったスポーツ熱である。20年代はスポーツの時代でもあり、身体運動への関心が、この時代にひとつのクライマックスを迎えた。だがこの関心の高まりは、すでに以前から準備されていた。19世紀半ば頃から、国民意識の覚醒をめざした精神と身体の鍛錬としての体操が普及した。これに遅れて19世紀末には、イギリス起源のフットボール、ゴルフ、テニスなどが次第に人気を高めた。スキーやスケート、水泳、自転車競技も同じ頃に徐々に広まった。こうした身体運動の普及をおすすめたのは、19世紀後半の都市化と工業化である。大都市の住環境・職場環境は往々にして劣悪だったため、身体運動による健康維持を唱える声が大きくなった。大都市のホワイトカラーとブルーカラーが余暇時間をもてるようになったことも、スポーツ普及の要因である。拘束時間が長く不規則な農業従事者や奉公人と

異なり、彼らは比較的一定した時間に仕事が終わりに、また決まった日に休みがとれた。つまりこの余暇時間をスポーツにあてることができたのである。さらに大都市には、運動施設と交通機関、そしてスポンサーとなる企業など、スポーツ普及の経済的・技術的な条件が揃っていた。

第一次大戦後には、こうして準備されていた基盤の上に、スポーツ熱が一気に花開いた。敗戦国ドイツでは、強い兵士を作るための身体鍛錬としてスポーツを推奨する声も、一部では高かった。しかしスポーツ人気を支えていたのは、そうした軍国主義的な身体観だけではなかった。自然の中で解放された肉体への憧れ。スピードや力といったエネルギーの魅力。身体活動の数値化、視覚化、比較。さまざまに動機づけられた身体への関心が、身体運動への熱狂となってあらわれていた。この時代には、何らかのスポーツに従事する者の数が増えただけでなく、スポーツの種類も多様化し、それに応じた機関や施設も整えられていった。<sup>3)</sup> 体育教育の重要性が唱えられ、1920年には最初の体育大学がベルリンに設けられた。またスポーツを受動的に楽しむ人の数も、みずから従事する者の数に劣らず、増えていった。特にボクシング、テニス、自転車競技などの競技スポーツでは、観客の数の方が圧倒的に多かった。これらの競技はイラストや写真入りで新聞・雑誌で報じられ、熱狂的なファンを増やした。当時発展しつつあったマスメディアがスポーツ熱にいかに関与したか、強調してもしすぎることはない。1923年からはラジオがスポーツ中継をはじめ、スポーツへの関心をさらに煽った。スポーツには、スピード、効率、結果の計測と比較、センセーションといったモダンの要素が内在しており、メディアはこれを

3) 1920年にすでに人口約390万人に達していたドイツ最大の都市、ワイマール共和国の首都ベルリンの例を挙げておく。1928年には市営の屋外プールないし水浴場が8、室内プールが10あり、ヴァン湖畔水浴場には1926年一年間に延べ680万人が訪れた。競技場・球技場は1928年に307を数え、そのうち140は市営ないし国営、残りはクラブ所有のものだった。住民ひとりあたりの競技場・球技場の数は、1921年から1928年にかけて4倍となっている。スポーツクラブの総数は1928年に2334であった。Vgl. Lewald, Theodor/Diem, Carl: Berlin als Sportstadt. In: Die deutschen Zeitungsverleger in Berlin. Berlin 1928, S.40-45.

増幅させてスポーツ人気を高めたのであった。

このスポーツ熱を背景に、戦争中に運動へと準備されていた女性身体は、スポーツを見出していく。海水浴場、湖畔やプールには水着姿の女性が溢れた。彼女たちは以前のように日光浴だけで満足してはいない。多くの女性がトリコットのぴったりとした水着をつけて泳ぎはじめた。(図1参照)体操は、19世紀半ばから一部の中上流市民層の女性の間で行われていた。ただしこれは、ほとんどの場合、ヤーン流の硬い動きの体操であった。ワイマール時代に入り、体操をする女性の数は爆発的に増え、また体操の種類も大きく変わった。この時代に人気のあった体操は、もはやヤーン流ではなく、フランソワ・デルサルトやエーミール・ジャック＝ダルクローズの流れを汲む、リズムにのった優美な動きのものであった。体操クラブや体操教室が次々に新設され、学校の授業に取り入れられ、企業が従業員のために体操教室を開いた。水泳と体操は、個人が揃えなければならない道具が最小限ですみ、公園や湖といった場所さえあればよかったから、この手軽さも急速な普及の一因であったろう。巷ではダンス、とりわけアメリカ生まれの、シミーやチャールストンといったジャズダンスが流行した。これは激しいリズムにあわせ、身体を激しく揺さぶるもので、従来の社交ダンスの動きからかけ離れた踊りであった。ダンスホールは連日深夜まで賑わい、各地でダンスコンテストが開かれた。これ以外にも、中上流市民層の女性は、テニス、ゴルフ、スキーといったスポーツを愛好していた。これは費用のかさむ贅沢なスポーツで、彼女たちのステータスシンボルでもあった。

女性スポーツの発展には、企業におけるスポーツ活動やスポーツクラブの充実が大きく寄与した。都市部に増えたホワイトカラーやブルーカラーの女性の多くには、企業主催のスポーツ活動に参加する機会が与えられていた。また女性に門戸をひらいたスポーツクラブや女性専用のスポーツクラブも、その数を増した。教育関係者や行政担当者のあいだでも女性の身体教育に対する関心は高まった。1925年にはドイツ女性協会連合(Bund

der deutschen Frauenvereine) によって、国家体育委員会 (Reichsaus-schuß für Leibesübungen) の協賛のもと、女性の身体教育をめぐる会議が開催され、ドイツ全土の教育関係者と体操関係者、スポーツ関係者が一堂に会した。<sup>4)</sup>

しかし何と言っても、女性スポーツが流行現象となった過程では、絵や写真入りのモード雑誌が果たした役割が大きかった。モード雑誌は、スポーツをする身体、スポーティーな身体を、新たな理想像として構築し、そのイメージをふりまいた。それと並行して、大衆的なスポーツ誌上でも、女性スポーツ、そして女性のスポーツする身体をめぐる議論が、さかんに行われていた。こうしたスポーツ誌も、モード雑誌さながら、絵や写真をふんだんに盛り込み、広範な読者層を対象としていた。

## 解放された身体

戦後間もない 1920 年 11 月の『淑女』に、「戦時とモード」と題されたエッセイが掲載されている。『淑女』は、ウルシュタイン社発行の、当時最も広く読まれていたモード雑誌である。豊富なイラストによる最新ファッションの紹介だけでなく、写真入りのバリヤリゾート便り、エッセイなども載せ、新しいモード雑誌として、従来の婦人雑誌に飽き足りない多くの女性読者を獲得していた。

さてこのエッセイは、戦時中のファッションを論じ、さまざまな立場から批判されていた過去数年間の女性のモードを、その新しさにおいて救い出そうとする。

「[女性が戦時中に始めた]こうした不慣れな仕事には、どのようなカットの服がふさわしかっただろう。もちろん脚を出した、布地を節約し

4) 女性運動の文脈では、すでに 19 世紀半ばに女性の身体教育の必要性は唱えられており、ベルリンやライプツィヒに女子体操協会が設立された。田村雲供『近代ドイツ女性史』阿吽社、1998 年、112-113 ページ。

たモードだ。これはからだをゆるく、締め付けずに、覆ったのである。[...] どうやったら小股歩きしかできないスカートを、時代の流れ、迅速なテンポ、仕事と調和させることができただろうか。巨大な袖という贅沢な浪費を、どうしたら実現できたろうか。働く女性は、鎧のようなコルセットでからだを縛り上げることに、どうして耐えられたろうか。」<sup>5)</sup>

第一次大戦は、身体を包み、身体の一部でもあるモードにおいて、画期的な変化をもたらしていた。布地の欠乏、職を持ち働きに行く女性が増えたこと、鉄道や地下鉄などの公共交通機関を利用して移動しなければならなかったこと。これらが第一次大戦が女性にもたらした変化として挙げられている。この変化はモードにも影響を及ぼさずにはいなかった。

エッセイの執筆者マリー・フォン・ブンゼンは、以前の服は女性の身体にとって枷であり、布地の浪費、合理性のかけらもない飾りであったと一蹴し、それに引き換え、大戦中に生まれた新しいモードの合理的な特徴を評価する。新モードは、大都市での生活、とりわけ家の外部での移動や労働の状況に適した、実用的なものなのである。しかしこの合理的なモードを生み出した原因は、物質上・生活上の諸条件だけではない。ブンゼンは、こうした生活の変化にうながされて生じた女性身体観の変化にもふれ、「教養ある女性に、これほど力と健康を求めた時代はかつてなかった」と述べている。それまでは、力や健康が必要とされたのは労働者階級の女たちであり、中上流市民層の女性たちの規範となっていたのは、「弱く繊細な女性」という像であった。第一次大戦により旧来の女性観は覆され、健康で力強い女性という新しい女性観が生まれた。新しいモードはこの女性像を体現するもの、すなわち「過去との決別」の態度表明でもあるのだ。

---

5) Bunsen, Marie von: Kriegszeit und Mode. Die Dame. November 1920. In: Die Dame. Ein deutsches Journal für den verwöhnten Geschmack. Zusammenge stellt und herausgegeben von Christian Ferber. Berlin (Ullstein) 1980, S.97f.



このエッセイで称えられた新しいモード、合理性と動きやすさを重視したファッションは、ワイマール時代を通じて流行し定着していった。このモードの重要なキーワードのひとつがスポーティーである。1927年頃まで、ジャンパー、膝丈のスカート、セーターといった、スポーツウエアの特徴を取り入れたスポーティーなファッションは、さまざまなバリエーションを生み出しながら、最新のモードであり続けた。コルセットをつけない簡素なシルエット、手足を出したスタイル、伸縮性のあるしなやかな素材、少年のような短髪。（図2参照）こうしたスポーティーな装いがモード雑誌を飾った。モード雑誌の少なからぬ部分を占めていたブティックの広告にも、スポーティーな服が頻繁に登場している。

スポーティーな身体は、先に引いたエッセイに見たように、モードの言説によって、女性の精神と身体の解放と結びつけて語られている。身体はコルセットや引き裾、大きく膨らんだりドレープをとった袖といった、物質的な枷から解放された。これまで囚われていた家から、職場、街路、運動場、リゾート地へと、飛び出してきた女性たち。そして「迅速なテンポと効率」「力と健康」という、従来的女性性の対極にある身体的特徴。これらに焦点があてられ、モードの言説では、スポーティーな身体は、今や「動きの自由」（『淑女』1925年11号）を心ゆくまで享受している。

動きの自由を獲得したスポーティーな身体は、空間に拘束されない、移動の可能性を秘めた身体である。これを明確にテーマとして描き出したのが、当時増えつつあった自動車の広告である。『淑女』と同じくウルシュタイン社から出ていた月刊総合誌『みみずく』（UHU）1926年7月号のメルセデス・ベンツの広告は、「運転席の淑女」を謳い、女性にドライブを呼びかけている。（図3参照）ベンツ社の自動車が下に描かれ、その上方にこの自動車の所有者・運転者であるとおぼしきスリムな女性。その横の広告文は次のようなものである。

運転席の淑女。もう珍しくない光景です。彼女の活発な気質は、現代

の迅速なりズムに親近感を感じています。空間の支配、スピード、スポーツ活動、自然を愉しむ気持ちの高まり、神経の安らぎ、こうした自動車の利点すべてを女性はいち早く感じ取ります。<sup>6)</sup>

女性は自動車の新しさ、テンポ、そして移動可能性を象徴している。ここで構想されている女性身体は、空間を支配し、ひとりで気の向くままに移動し、スピードをも操る、高度に自律的なものである。自然と空間を支配する自律した主体。これは近代産業社会の主体、すなわち市民であり男性である主体と瓜二つである。近代の自律的主体の特徴を帯びた女性身体は、きわめてモダンな機械である自動車を操り、時代の特徴となったスピードによって、自由に空間を駆け抜けていく。女性の身体は、従来のくびきから解放されたのみならず、自然と空間に対する優位を獲得し、きわめて自律的で近代的なものとして描かれている。実際には自動車そのものがまだ高価で、自家用車はそれほど普及しておらず、加えて車を運転する女性はまだ数えるほどしかいなかった。にもかかわらず、自動車を運転する女性は、繰り返しモード雑誌の記事や広告に登場している。

## 身体をつくる

スポーティーなモードが要求し、マスメディアを通じて理想とされたスポーティーな女性身体は、ほっそりとして、極端な凹凸がなく、しなやかでなければならなかった。1923年夏の『淑女』に掲載された短編小説では、主人公のスポーツマンが、理想の女性身体として、引き締まった少年のようなからだつきを求めている。

とくに彼女はごくほっそりとしていなければならない。ただ食餌療法や薬で痩せ細っているのではだめ。贅肉がなくて、はがねのように強

---

6) UHU. Juli 1926. In: UHU. Das Magazin der 20er Jahre. Zusammengestellt und herausgegeben von Christian Ferber. Berlin (Ullstein) 1979, S.46.

靱で、優美で、元気がよくなくてはいけない。<sup>7)</sup>

マスメディアの力により、スレンダーで柔軟な身体は規範となり、多くの女性がこの規範どおりの身体を求めた。安価でかつ最先端の流行を取り入れた既製服が一般に普及しはじめたことも、この傾向に拍車をかけた。自分のからだにあった服を作らせるのではなく、流行となり標準となった既製服のサイズとラインに自分の肉体を合わせなければならなくなった。

社会学者のフィンケルシュタインによれば、近代になって「個性」というものが生まれ、人は、衣服や装飾品といったファッションで身体を成形し、社会のなかで自らの占める位置を主張し、表現し、確定するようになった。ファッションは、近代社会の中で拡散していこうとする自分に、閉じた自己同一性を与える方法である。<sup>8)</sup> この「身体を成形する」というファッションの契機は、20世紀にはいり新しい次元を獲得する。大量消費社会とマスメディアの時代においては、身体の成形は、産業とメディアによって作られたイメージを追求する行為となる。流行の身体像は規範となり、個人のからだを左右する力をもつようになる。理想として掲げられた身体像を受け入れるにせよ、拒否するにせよ、個々の身体はつねに理想の身体イメージと照らし合わされ、比較される。

また、スポーティーな身体という身体像とともに、身体を、まるで衣服のように整えることができるという身体観が浸透していった。

すらりとして... 優美で... 若々しくて生き生きとしている！

言うは易し行うは難しとお思いですか？——実はとてもたやすいことなのです。エリザベス・アーデンの新しいすてきなサロンで行う一連の体操も。この体操をすれば、あなたの体型と生命力、精神と魂さえ

7) Die Dame. 1923 Heft 22, S.26.

8) ジョアン・フィンケルシュタイン『ファッションの社会学』成美弘至訳、せりか書房、1998年。69ページ以降。

も、驚くほど短期間のうちに、何歳も若返ることでしょう。ミス・アーデンの体操講師とアポイントメントをおとりください。彼女はあなたに、あなたの身体をしなやかでスリムにし、体重を減らすミス・アーデンの方法をすべてお教えいたします。<sup>9)</sup>

『淑女』に掲載された化粧品メーカーの広告である。すらりとしたスポーティーな身体が理想の身体像であることが自明の前提とされている。そして読者たる女性に、構築可能な所有物である身体を、この理想に近づけるよう促している。この広告は、女性の身体がたやすく作り上げることのできる「もの」であるという身体観にたち、身体管理の方法を示唆し、その方法に投資するように誘っている。身体はこうして女性自身の消費行動の対象とされ、投資の対象物となっている。

この構造はモードの言説に共通している。スポーティーな身体という理想像は、このイメージにしたがって自分のからだを構築するように、女性を促す。マスメディアと広告は、理想の身体イメージを作りだし普及させ、女性がこのイメージを自らのからだで実現するための手段も豊富に提供する。身体は今や、装身具や衣服によって整えられるだけでなく、身体そのものに手を加え形づくることができると考えられるようになった。こうして身体は管理可能な所有物であるという意識が一般化していく。物象化された女性身体の管理のために、化粧品、痩身薬、美容器具、美容体操など、ありとあらゆるアイテムや方法が、またしても産業とマスメディアによって提供される。女性の身体は、このような回路を通して、大量消費のサイクルに組み込まれていく。

## スポーツ雑誌における理想の女性身体

スポーツの言説においては、スポーツをする女性が増加するにつれて、

---

9) Die Dame. November 1932. In: Ferber: Die Dame, S.286.

女性スポーツをめぐる議論が活発に展開されるようになった。議論は、スポーツの女性身体への影響、女性にふさわしい種目の選定から女性身体の規定にまで及んでいた。

雑誌『健康』（Die Gesundheit ベルリン、1919-1922）は、1922年に「女性に適したスポーツの種目は？」というタイトルの記事を掲載している。この雑誌は1922年の半ばから『スポーツと健康』（Sport und Gesundheit ベルリン、1922-1939）と表題を変えるのだが、その名の通り、健康とスポーツを総合的に扱った週刊誌である。ベルリンのAjaxスポーツクラブによって発行されていたが、寄稿者にはカール・ディームといった当時のスポーツ界の有力者をはじめとして、国家体育委員会委員、医者、体育教師などが揃っている。スポーツについては、体操からボクシングまで幅広い種目を、競技ニュース、有名選手の紹介、効用などさまざまな角度から論じている。

さて「女性に適したスポーツの種目」であるが、いわゆる「男性的な種目」は、女性の健康に悪影響を与えかねず、女性には適さないと警告される。「男性的な」種目を無理に行ったために、健康を害した女性が多くいると脅かすのである。<sup>10)</sup> この記事では、女性の身体がその機能と強さにおいて男性とは異なったものであること、男性の身体よりも弱いことが前提とされている。この前提に基づいて記事は、似非医学的な調子で、女性のスポーツを特定の種目に限定しようとする。激しいスポーツ、とりわけ競技スポーツと格闘技が女性の身体におよぼす悪影響は、スポーツと医学の言説によっていたるところで唱えられていた。ベルリン体育大学の講師であったリゼロット・ディームによると、とくに婦人科医の多くが出産機能への悪影響を主張して、女性スポーツに強く反対していた。<sup>11)</sup> 医学の言説は、生物学的な差異を所与の前提として、女性の身体が男性の身体とはも

10) Welche Sportarten eignen sich für Frauen? In: Beilage zur Zeitschrift Gesundheit. 1922 Nr. 31/32.

11) Vgl. Diem, Lieselott: Frau und Sport. Ein Beitrag zur Frauenbewegung. Freiburg (Herderbücherei) 1980, S.117.

とから異なり、これに較べて弱いという見方を正当化した。この生物学的本質主義の立場からすると、「自然に備わった差異」は克服できない。女性の身体は特殊なものに見なされ、その特殊性に適ったスポーツのみが女性に許された。スポーツによって女性の身体は自由な動きを獲得し、解放されたかに思われる。だが同時に、スポーツする女性身体をめぐる言説は、身体を新たな境界の中に閉じ込めもしたのである。

ところで、こうした医学的観点からスポーティーな女性身体を規定する論は、もう一つの観点から行われる議論に較べて、圧倒的に数が少ない。少なくともスポーツ雑誌ではこの立場の主張はそれほど目立たない。スポーツ雑誌は、競技スポーツや格闘技において、もちろん健康を保ったまま、すぐれた業績をあげる女性競技者も紹介しているために、女性の身体機能が男性のそれに較べて劣っているという主張は展開しにくかったのだろう。「女性の身体は、健康を害することなく、あらゆる常識的なスポーツによる負荷に耐えられる」<sup>12)</sup> という主張すら見られる。

スポーティーな女性身体を規定しようとする議論が最も頻繁に引き合いに出す論拠は、身体の美である。1922年の記事「女性に適したスポーツの種目は？」においても、健康のほかに、美的側面が組上にのせられる。

この[女性のスポーツという]問題の美的な側面について言えば、ご婦人がたが行っているある種の競争は、実際に見ても、また写真で見ても、往々にしてただ不快感を与えるだけである。<sup>13)</sup>

スポーツする女性の身体は美しく見えなければならない。女性のスポーツにおいては、これを見る男性の視線が前提とされているのだ。スポーティーな女性身体は、男性の見る快樂の対象なのである。

---

12) Die Frauengymnastik im Kampf um das System. In: Sport und Gesundheit. 1925 Nr.21.

13) Beilage zur Zeitschrift „Gesundheit“. 1922 Nr. 31/32.

ではここで言われている、スポーティーな女性身体の美とはどのようなものなのだろうか。新たな美、従来の「女性的」とされた美的規範とは異なった美の可能性が、開かれているのだろうか。

『スポーツと健康』には、スポーティーな女性身体の美しさについて論じる記事が、繰り返し掲載されている。以下の引用もそのひとつである。

とりわけ留意しなければならないのは、スポーツが女性的な優美さを高めこそすれ、これを害してはならないという点である。スポーツの主要な目標は、スポーツ活動によって体を調和のとれた美しい形にすることにあるのだから。したがって女性は、ただ「力をつける」結果に終わる種目を選んで서는ならない。優美と閑雅が、スポーツにおいても、女性と切っても切り離せない性質であることを銘記しておかなければならない。<sup>14)</sup>

優美と閑雅 (Anmut und Grazie) は女性スポーツを語る言説のキーワードである。『スポーツと健康』でも、スポーツが女性の美に与える影響について論じた記事の大部分が、このふたつの言葉のどちらか、たいていは両方を、中心に据えて展開している。優美でしとやかで調和のとれた身体こそが、運動をする女性身体の理想だというのである。これらの概念は、従来、女性に固有のものとしてされてきた特徴であり、女性性の規範として機能している。優美、閑雅、調和という特質は女性的なものとして、つねに男性的な「力」に対置されるものであった。スポーツの言説は、この二項対立を所与の前提として、それをさらに堅固なものにしようとするのである。女性身体が男性的な「力」をつけるのは、悪しき逸脱である。女性身体は、身体運動を通して、「女性特有の」身体の形態と身ごなしを身につけるべきだと説かれる。そして「女性らしい」特質を養うために、適度の水泳のほ

14) Nach welchen Gesichtspunkten soll die Frau Sport treiben? In: Sport und Gesundheit. 1925 Nr. 44.

か、わけても体操が推奨された。<sup>15)</sup> (図4参照)

優美で調和の取れた身体を作り出すことを、女性の身体運動の最終目標としたのは、20世紀初頭の身体文化運動であった。ヤーン流の体操(Turnen)が鍛錬によって強靱で健康な身体を作ることを目指していたのに対し、身体文化運動の中から現れてきた体操が志向していたのは、「自然な」身体の調和の取れた美しさであった。これは近代文明において疎外されてきた身体を再発見し、身体、精神、情緒の間の調和を取り戻そうとする動きであった。たとえばマルガレーテ・N・ツェプラーは1906年に『身体美を目指した教育。体操と舞踊。女子教育に関する試論』を出し、イギリスで行われていたカリステニクスに依拠した「美的体操」(Ästhetische Gymnastik)の教育の必要性を唱えていた。この美的体操では身体を完全にコントロールする能力が理想とされたが、これは身体を道具化するためではなく、その最終目標は調和のとれた優美、閑雅、快活で柔軟な身体の動きにあった。<sup>16)</sup> ワイマール時代に盛んになるリズム体操の基礎を築いたダルクローズも、身体文化運動の大きなうねりのなかで、1900年頃から彼のリトミックを編み出している。しかしこのような体操は、20世紀初頭は、まだごく少数の上流市民層や新興ブルジョワの娘たちを中心に、限られたサークルで行われているにすぎなかった。体操教室に通えるだけの金銭的・時間的余裕が必要だったのである。それがワイマール時代になると、学校に体操が取り入れられ、企業や女性労働団体が働く女性のための体操教室を催し、体操の裾野が一気に広がった。地域の体操クラブの数も急激に増えていった。

身体文化運動の影響のもとに発展してきたリズム体操 (Rhythmische

---

15) これは体操人口の男女別不均衡に明瞭に反映している。1930年に何らかの体操団体に属して体操を行っていた女性は85,000人ほどであったが、それに対し男性は6,000人にすぎなかった。Vgl. Czech, Michaela: Frauen und Sport im nationalsozialistischen Deutschland. Eine Untersuchung zur weiblichen Sportrealität in einem patriarchalen Herrschaftssystem. Berlin (Verlagsgesellschaft Tischler) 1994, S.155.

16) Linse, Ulrich: Das „natürliche“ Leben: Die Lebensreform. In: Dülmen, Richard van (Hg.): Erfindung des Menschen. Wien u. a. 1998, S.436ff.



Gymnastik) に共通しているのは、身体を内面や人間の自然が表出される場だと考える身体観である。体操は機械的な身体運動ではなく、内面の自然な発露だと主張された。一連の硬い動きからなるヤーン流の体操とは異なり、身体運動をリズムと不可分のものとし、身体のリズム感覚を研ぎ澄ますことに主眼をおいた。ダルクローズ、ボーデ、また 19 世紀半ばのデルサルートの流れを汲むものと、リズム体操はさまざまな方向性を示していた。しかし、調和の取れた自然、根源、直接性、身体リズムといった、近代社会の中で忘れ去られたものを取り戻すことに主眼をおいていたという点では、これらは共通している。女性はこの身体文化運動とリズム体操運動において、重要な担い手であり、また「特権者」でもあった。男性は自然の抑圧・支配を至上課題とする近代文明の担い手であると見なされていたのに対し、女性は身体にやどる自然のリズムをまだ完全には忘れておらず、根源とのつながりを喪失していないと考えられたのである。自然と文明、心と理性という二項対立は、それぞれの項が女性的なものと男性的なものという意味を付与され、性の二元論を支えてきた。身体の解放を叫んだ身体分化運動とその流れをくむリズム体操は、この二項対立を温存し、女性はまたしても、自然・心・魂・無意識といった二元論の一方の極へと、追いやられる。ここにおいて、女性の身体は、ふたたび二元論のうちに取りこまれてしまうのだ。

体操や水泳が「女性らしい」身体をつくりあげる手段として推奨される一方で、競技スポーツや格闘技は女性にはふさわしくないと忌避される。激しいスポーツは女性の身体を「変形」<sup>17)</sup> させるから、というのがその理由である。では変形とは身体のどのような変化を指しているのか。ここで参考になるのは、リゼロット・ディームが伝えるある婦人科医の言葉である。

フーゴー・ゼルハイムは彼の著書『機能上の発展という観点からみた

17) Leibesübung der Frau. In: Sport und Gesundheit. 1923 Nr. 47/48.

女性の体操』(1931年)で、スパルタの女性走者の像を「男性化した身体をもったギリシアの女ランナー」だと言っている。さらに最も優秀で美しいハードル走者のひとり評して「完全に男性的な体つきのスポーツ学生である。特に男性のような脚に注意を向けられたい」と述べているが、これは彼女がよく発達した筋肉を供えた体つきを示しているからにすぎない。<sup>18)</sup>

変形として忌み嫌われたのは、筋肉の発達した「男性のような」身体であった。これは従来の弱く繊細な女性身体、男性身体の対極にあるものとしての女性身体とはまったく相容れないものである。当時、陸上競技や競泳などの激しいスポーツによって鍛えられたスポーティーな女性身体からは、女性らしさが消え去ったとする見方が多かった。この鍛えられた身体には従来の女性性のメルクマールが欠けていたからである。

衣服、とくにスポーツ時の衣服は、男性の服に似てきている。長いスカートとロングヘアは消えてゆく。[...]力強く、意志の強そうな顔立ち。つまり私たちは、いわゆる性的特徴といわれるものが、スポーツと競争によって次から次へと消えていくさまを目の当たりにしているのだ。<sup>19)</sup>

スポーツする女性の外見上の特徴は、筋肉質な身体、ショートヘア、日焼けした肌、装飾を廃したシャツやズボン。これらは男性身体との差異を強調せず、むしろ目立たなくさせる。両性の身体の差異はほとんど認められなくなるのだ。(図5参照)さらに従来は、このような外見的特徴を、男性性のあらわれとして読むコードが定着していた。そのため、こうした特

---

18) Diem, S.117.

19) Annemarie Kopp. Zitiert nach: Eichberg, Henning: Sport zwischen Ertüchtigung und Selbstbefreiung. In: Dülmen, S.475.

徴をそなえた身体は、女性の男性化傾向を示すものとして解釈されることが多かった。流行のついでに街にあふれたスポーティーな女性の外観、スレンダーな体つきや簡素で実用的なファッションも、従来の「女らしさ」のコードから外れたモードである。そのためにこのモードも、男性化した女性の外見の特徴であると見なされ、攻撃された。このように従来の性差の規範において、男性に特有のものとされてきた特徴を女性身体が示しはじめたことは、男性のあいだに不安をもたらした。スポーティーな女性身体は、くびれた腰と豊かな胸・臀部という女性身体像に象徴される性役割、とくに出産という役割への反発と見られた。スポーティーな女性身体は、性的差異を揺り動かし、男女の間に明確に引かれ自明のものとしていた性差の境界を侵犯する存在とされたのである。だからこそスポーツの言説は、女性のスポーツを規定することにより、女性身体を従来の「女らしさ」の境界内に閉じ込めておこうとしたのである。この意味で、スポーツは、女性が「女らしい」身体の規範を身につけ、自らの身体で実践するための、トレーニングであった。いわば、スポーツによって性的規範の身体化が図られたのである。

## 機能的身体

ワイマール時代には、19世紀後半に始まった工業化、近代化が急速に進んだ。スポーツはその過程において重要な役割を果たした。近代社会では「自己解放としての業績と、他律的に定められた鍛練としての業績のあいだの分裂」が先鋭化してくる。この亀裂は労働という局面でもっとも顕著になる。近代スポーツもまた、自己解放と他律的鍛練とに引き裂かれた身体活動であり、スポーツは近代社会における身体モデルを提供している。スポーツは、一方では身体と自己の解放という潜在的可能性を秘めながら、他方では「工業社会における能力を高め合理化する」<sup>20)</sup>ために寄与したの

---

20) Eichberg, S.474.

である。身体能力を数値で計測された結果ではかるようになった社会のモデルとして、スポーツは機能したのであった。のみならず、スポーツは、効率的に動く身体を作るための訓練法でもあった。

「優雅」であるべき女性スポーツは、この傾向とは無縁だったのだろうか。1925年の『スポーツと健康』には次のように書かれている。

しかしドイツが必要としている男女は、快活なまなざしで仕事につき、仕事をスポーツのようにして力強い腕に引き受け、ごく迅速に、そして最良の方法で、仕事を完了する者たちである。<sup>21)</sup>

テイラー・システムが導入され、合理化が勧められた近代の産業社会においては、身体には無駄を廃した「迅速で最良の」動きが要求される。女性の身体にも、他律的に定められた目標値を効率的に達成する能力が求められた。スポーツはそのための身体訓練法となった。

運動を通じて身体の合目的性と機能性を高めるというスポーツ観は、とりわけ一部の女性体操に顕著であった。当時ドイツでさかんに受容されていたメンゼンディークの女性用体操もそのひとつである。メンゼンディークの『女性の身体文化』のドイツ語訳は1905年に初版が、1912年に改訂版が出ており、第一次大戦前からドイツでも一部において受容されていた。彼女の体操はこうした下地を経て、1920年代にドイツ各地の体操クラブやベルリンの体育大学で女性のための体操として広く行われるようになった。メンゼンディークの唱えた「機能的な女性体操」がめざしたのは、身体についての解剖学的な知識に基づき、身体各部の機能と動きの法則を正確に知り、各部を目的に合わせて合理的に統括して動かすことができる身体である。身体は、頭脳が設定した目的に合わせて適切に動くべき道具だとされた。

---

21) Zerstört oder erhält der Sport die Frauenschönheit? In: Sport und Gesundheit. 1925 Nr. 27.

身体の機能性のみを追及していくと、その理想は機械的な身体にいたる。歯車や機械の一部を接合された身体を示すグダのカラーージュから映画『メトロポリス』に描かれた、人間を脅かす機械的身体まで、この時代はさまざまな機械的身体の表象に満ちている。この時代、とりわけ製造業において、フォード・システムが導入され、機械を導入した分業が主流となっていった。オフィスの機械化が本格的に始まったのもこの頃である。この機械的な労働システムにおいては、人間の身体も機械の一部と化した。そこでは、機械の定めるスピードとリズムに即応する、そして機械的な単純な動作を繰り返し行うことのできる身体が必要とされた。

近代の工業における生産の合理化のほうが、身体文化よりも、リズムの問題の重要性を高めているように思われる。なぜなら近代的工業では、リズムは合目的性であり、生物的に身体を適合させ有効に活用することだからである。はっきり言うなら、ドルへの道なのである。<sup>22)</sup>

アメリカの近代的工業生産に関して書かれたこの文章は、ワイマール時代のドイツにもあてはまる。工業生産においても、タイピスト・電話交換手といったオフィスワークにおいても、一定のリズムとスピードを習得した身体が要求された。(図6参照)

他律的に定められたリズムにからだを合わせることは、身体を標準化、画一化することにほかならない。身体の画一化は、娯楽産業のレビュー、そしてワイマール時代後半に盛んになったマス体操において、徹底的に追求されることになる。この流れが後のナチスによる身体の標準化を準備するものであったことは、知られているとおりである。

当時流行のスポーティーなファッションも、身体の機能性を高めるといふ側面をもっていたことは、言うまでもないだろう。スポーティーなモー

22) Giese, Fritz: *Girlkultur. Vergleiche zwischen amerikanischem und europäischem Rhythmus und Lebensgefühl.* München (Delphin-Verlag) 1925, S.25.

ドによって、近代の都市生活に適した動きが女性身体に可能になったことを、わたしたちは先に確認した。また当時のモードによって、身体の画一化・標準化が求められたことも、すでに見たとおりである。

## 高性能の母体

スポーツによってその機能を高められた女性身体が投入されるのは、標準化された労働の場だけではなかった。スポーツにより健康で強靱にされた女性身体は、健康な母体として賞賛されもした。医学界の言説が、激しい運動は子宮に悪影響を及ぼすとして、スポーツをタブーにしていたのに対し、スポーツの言説は、スポーツが出産機能に与える好影響を強調している。女性にとってのスポーツの重要性と有用性についての議論は、くり返し、女性身体の母体という側面に光をあてる。曰く、スポーティーな女性身体は、健康な子供を数多く出産するという、女性の「使命」を果たすのに適した身体である。そこでは女性の身体は、母体機能に限定されてしまっている。

『スポーツと健康』の1923年37/38号の表紙に掲載された「スポーツと女性美」という記事も、スポーツの母体に与える好影響を論じ、女性スポーツの奨励を唱えている。記事は、母体としての身体を強化することが女性の「祖国に対する義務」であると主張し、スポーツをその義務の実現のための手段として位置づけている。

女性は、上流階級の婦人も大衆も、ドイツのスポーツの根底にある偉大な目標のために貢献しなければならない。われわれの未来の建設に参加し、ドイツ民族を強化し、新しく健康な人種を生み出すという目標のために。<sup>23)</sup>

---

23) Sport und Frauenschönheit. In: Sport und Gesundheit. 1923 Nr. 37/38.

「未来の建設」、「ドイツ民族の強化」、そして「新しく健康な人種」。女性身体はこうしたスポーツの言説によって、優生学的思想にもとづいた人種観に結びつけられた。スポーツによって強く健康にされた〈女性身体=母体〉は、もはや女性だけの私的な領域ではない。それは人種の強化と健全化のための公的・政治的な場となる。女性身体はこうして、ドイツ民族の未来を担う世代の母胎として、国家レベルの優生学的政策に組み込まれていった。

ピア・シュミットによると、子供を産み育てる「生産的身体」として、女性の身体が注目されてきたのは、18世紀末の啓蒙の時代、そして重商主義と重農主義の時代であるという。<sup>24)</sup> その「生産的身体」は19世紀後半の医学的言説、そしてまた20世紀初頭の身体文化運動により、民族・人種と結びつけられるようになった。この流れにスポーツの言説も加わっていった。スポーティーな身体は、優生学的身体観によってつらぬかれてもいたのである。

## おわりに

スポーティーな女性身体には、多様な意味が与えられている。ときには矛盾する意味が。それは女性の身体像が実際の女性身体とは無関係の、言語的構築物であるがゆえの、当然の帰結である。スポーティーな身体は、メディアにのったモードとスポーツの言説において、ひとつの理想的イメージとして構築された。このスポーティーな女性身体は、ナチス政権下において、高性能の労働身体と健全な母体という二極に収斂していく。スポーティーな女性身体は、解放された身体、また性差のメルクマールを消し去った身体として、従来の女性性の境界を揺さぶる可能性を秘めていた。だからこそ時には脅威として感じられ、激しく攻撃されたのもあった。

---

24) Schmid, Pia: Sauber und schwach, stark und stillend. Der weibliche Körper im pädagogischen Diskurs der beginnenden Moderne. In: Akasche-Böhme, Farideh (Hg.): Von der Auffälligkeit des Leibes. Frankfurt a. M. (Suhrkamp) 1995, S. 55ff.

だが同時にこの身体像は、女性身体を、従来の女性性の中に閉じ込めるところか、近代的労働システムや優生学的政策に組み入れる役割を果たした。

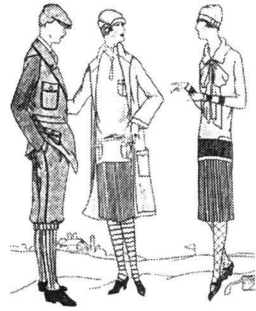
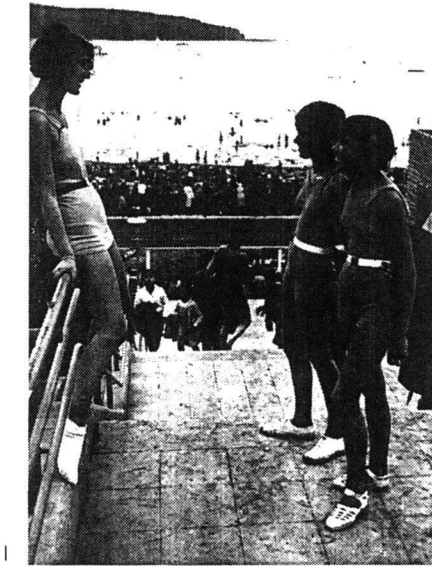
ここで示された理想像が実現可能であるかどうか、実際に女性がどこまで実現していたかどうかは、問題ではない。むしろ理想像を示し、その理想を内面化させ、その理想に少しでも近づくようにと、女性たちを巧みに誘うのが、メディアにのったモードとスポーツの言説の役割であった。モードとスポーツの言説は、スポーティーな女性身体を理想として掲げ、その身体を、衣服、体型、身体運動を通じて、身体化するようにうながしたのである。

最後に、この新しい身体イメージが成立したのは、ワイマール時代であったということを、思い返しておきたい。マスメディアが発展し情報が溢れだし、大量消費が本格的に始まる時代である。そのために、スポーティーな身体という理想像の登場とともに、女性の身体はそれまで以上に複雑な力関係の磁場に取りこまれた。男性、マスメディア、産業、国家といったさまざまなレベルの力によって、女性身体に書き込まれた意味は、どれもメディアによって規範的イメージとして女性に媒介された。理想像の生成の過程には、もちろん女性自身が創造的にかかわっていたことだろう。たとえばフランスのテニス選手シュザンヌ・ラングランは、袖無しの服、ターバン風の帽子といった斬新でお洒落なウェアと優美な動きによって、画期的なスポーツウーマンのイメージを作り出した。<sup>25)</sup>しかし個々の女性によって切り開かれた身体の新しい可能性は、マスメディアにのるとすぐさま規範的イメージへと転化する。それは大量消費の道具と化し、また身体管理の手段へと反転する。現代社会の原型が成立したワイマール時代に顕著になった、女性の身体をつらぬくこのアポリアは、現在まで続いている。

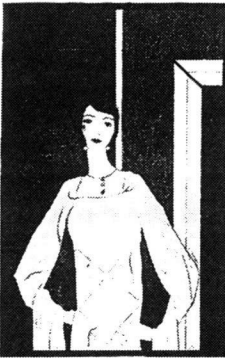
---

25) アレン・グッドマン『スポーツとエロス』樋口秀雄訳、柏書房、1998年、95ページ。





2

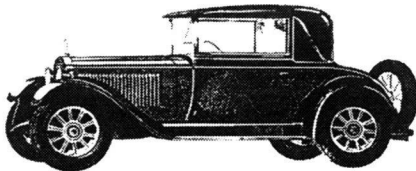


DIE  
DAME  
AM STEUER

heute eine schon selbstverständlich gewordene Erkenntnis: Die weibliche Temperament ist nicht unvereinbar mit dem raschen Rhythmus unserer Zeit. Die Beherrschung des Räumens, Gedulde, sportliche Betätigung, gesellige Freizeite an der Natur, Abspannung der Nerven alle Vorteile des Kraftfahrens werden von der Frau am raschesten empfunden. In der eleganten Linie des Wagens finden wir den Ausdruck für deren angeborenes Selbstbewusstsein. — Die Dame am Steuer — ein Symbol unserer Zeit, die Dame am Steuer eines MERCEDES-BENZ ein Symbol der vollkommenen Harmonie.



4

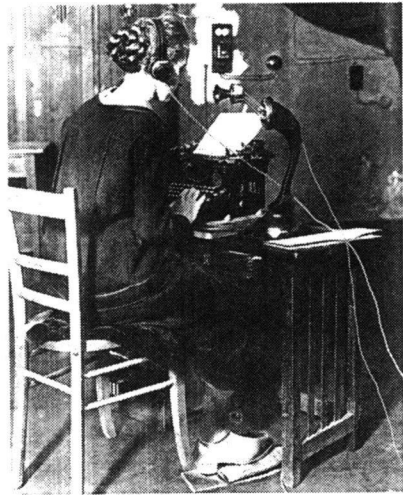


Mercedes-Benz

3



5



6

- 1 1931年頃のベルリン、ヴァン湖畔水浴場 (BG/Umbo)。In: Friedrich, Thomas: Berlin in Bildern 1918-1933. München (Wilhelm Heyne) 1991, S. 198.
- 2 ランヴァンのジャンパー、1926年のモード。In: Loschek, Ingrid: Die Mode im 20. Jahrhundert. München (Bruckmann) 1995, S.85.
- 3 『みみずく』1926年7月号に掲載されたメルセデス・ベンツ社の広告。In: UHU. Das Magazin der 20er Jahre. Berlin (Ullstein) 1979, S.46.
- 4 ダルクローズのリトミック体操。海野弘『モダンダンスの歴史』新書館、1999年、19ページ。
- 5 棒高跳びをする女性。In: Soden, Kristine von/Schmidt, Maruta (Hg.): Neue Frauen. Die zwanziger Jahre. Berlin (Elefanten Press) 1988, S.168.
- 6 オフィスの合理化。ベルリンの郵政局では1931年に口述筆記に電話線が導入された。In: Friedrich, S.171.

# Der sportliche Körper

## Ein Frauenkörper der Weimarer Republik

### Yumiko Washinosu

Die Weimarer Zeit, die Zeit der allgemeinen Sportbegeisterung, ist von einem neuen weiblichen Körper geprägt, vom sportlichen Körper. Zwar existierten bereits Mitte des 19. Jahrhunderts Frauen, die Sport trieben bzw. turnten. Erst in den 20er Jahren wurde jedoch der sportliche Frauenkörper als neue Erscheinung häufig thematisiert. Er wurde durch die Massenmedien, u. a. durch illustrierte Mode- und Sportzeitschriften verbreitet und als neues Ideal der Weiblichkeit propagiert. Sein Bild wurde stark durch die und in den Medien bestimmt.

In Modezeitschriften ist oft ein Bild der Frau entworfen, deren Körper befreit ist. Ihr Körper ist durch die neue sportliche Mode wie schlichte Kleidungsform, den kniekurzen Rock, Kurzhaarfrisur gekennzeichnet: Er ist also von den bisherigen physischen Fesseln befreit. Im Diskurs der Mode wurde außerdem der sportliche Körper als Symbol der Befreiung vom tradierten weiblichen Körperbild und Verhaltenskodex dargestellt.

Durch den Diskurs der Mode wurde der sportliche schlanke Körper aber auch zu einer neuen Körpernorm. Die Durchsetzung der Konfektionsmode wirkte dabei mit. Mit der Massenproduktion und der Standardisierung der Industrie begann auch die Normierung des Körpers. Die Frauen wurden aufgefordert, ihren Körper nach der Norm zu gestalten und zu formen: Methoden und Mittel dazu wurden reichlich angeboten. Damit entstand das Bewusstsein, dass der eigene Körper

wie ein Gegenstand zu behandeln und zu formen sei.

Während manche Gemüter den sportlichen Frauenkörper als „Vermännlichung der Frau“ betrachteten und verwarfen, gab es seitens des sportlichen Diskurses Versuche, ihn einzugrenzen: Man grenzte die Sportarten der Frau von denen des Manns aufgrund der angeblich unterschiedlichen Körpereigenschaften ab. Abgrenzung bzw. Ausschließung der Frau aus den Männersportarten begründete man mit pseudo-medizinischen, und v. a. mit ästhetischen Argumenten, die am tradierten Weiblichkeitsmuster orientiert sind. Hier wurde versucht, durch Sport die Geschlechtergrenzen zu befestigen.

Sport kam außerdem die Rolle zu, in der Zeit der zunehmenden Industrialisierung und der Rationalisierung den weiblichen Körper leistungsfähig zu machen. Sport funktioniert als Disziplinierungsübung, bei der die Frau lernt, den eigenen Körper zu beherrschen und dem Ziel gemessen zu steuern. Sport hatte gleichzeitig die Aufgabe, den weiblichen Körper als Gebärmutter gesund und leistungsfähig zu machen und so zu erhalten. Manche Aussagen über die positive Wirkung des Sportes auf den gebärenden Körper haben eine rassenhygienische Tendenz.

Der weibliche Körper funktioniert als leerer Ort, ja fast wie ein ungeschriebenes Blatt und wird mit unterschiedlichen Bedeutungen gefüllt. Im fortschreitenden Prozess der Industrialisierung, des Massenkonsums und der nationalen Entwicklung spielte der sportliche Frauenkörper als Idealbild mit einem Bedeutungskomplex eine wichtige Rolle.

(慶應義塾大学非常勤講師)